

『道命阿闍梨集』注釈(八)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柏木, 由夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6542

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『道命阿闍梨集』注釈(八)

柏木由夫

【キーワード】 時鳥、花山院、嵐山、法輪寺

内侍のかみうせたまへるとし、その御いへにさくらのいみじうさきたるをみたまひて、右大臣どのより内侍のはゝの御もとに

221 きみもなきやどにほへるさくらゆゑはるのすがたをおもひいつらむ

【校異】 ○かみ―かみの(谷)、○うせた□□る―うせたまへる(書)・書₂・谷)、○さくらの―桜花(谷)、○内侍のはゝの―内侍の(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 尚侍が亡くなられた年に、その御邸に桜が豪華に咲いているのを御覧になって、右大臣殿から尚侍の母上の御手許に主もいない宿に咲き誇る桜なので、あの方の花のように美しかった春の姿を思い出していらっしやるのでしょうか。

【語釈】

『道命阿闍梨集』注釈(八)

○内侍のかみうせたまへるとし―一二四の語釈参照。「内侍のかみ」は、三条院尚侍だった兼家女綏子。道綱の義姉妹。道命の叔母。寛弘元年(一〇〇四)二月七日没。

○右大臣どの―一二四の語釈参照。正しくは左大臣の藤原道長か。
○内侍のはゝ―一二四の語釈参照。『蜻蛉日記』に登場する兼家妾の一人「近江」。

○きみ―一二四の語釈参照。「内侍のかみ」。
○はるのすがた―桜に比べられるほど美しかった尚侍綏子の春の姿。
【評】 一二四に重出、四句「花のすがたを」。

222 なき人のかたみとおもひし花にさへたちおくれたる身をいかにせん
とありける御かへししてとありしに

【校異】 ○花にさへ―花ゆゑに(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 とあった御返事をしてほしいとあったので死に遅れた上、亡くなった人の形見と見ていた花にまでも遅れて残ってしまった我が身をどうしたらよいのでしょうか。

【語釈】

○なき人―一二五の語釈参照。「内侍のかみ」の綏子。

○たちおくれたる身―二二一の詞書からは、花が咲くことに自分が遅れたとの意になる。しかし、「たちおくれ」は、「霞・煙・衣・法・道」などの縁語とともに用いることが通常だから、「花」とのつながりからすれば、一二五の本文「ちりおくれ」の方が適切だろう。

そうだとすれば、亡き娘と落花に対して、この世に残った我が身を表すことになる。

○いかにせん―一二五の語釈参照。

【評】 一二五に重出、二句「かたみとおもふ」、四句「ちりおくれぬる」。一二五の「評」にも記したように、亡き娘綏子への母の気持ち道を道命が代作したと知られる。詳しくは一二五の注釈参照。三保サト子氏は「法輪寺の道命阿闍梨」（島根女子短期大学紀要）第二六号、昭和六十三年）で、二一七〜二三五をA群として、すべて寛弘元年（一一〇四）の成立とする。

月前に花をおもふといふ題を花山院よませ給しに

223 はるのよは月みるそらもなかりけり花のうへのみおもひやられて

【校異】 ○花山院―花山院より（谷）、○そら―へく（書）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 月前に花を思うという題を花山院が詠ませなされた時に春の夜は空に月を見る気にもならないよ。月光の中の花の事ばかりが思い浮かべられて。

【語釈】

○月前に花をおもふ―『平安和歌題索引』に拠ると同題は他になく、「月前：…」は「月前笛音」（公任集・五一）、「月前白菊」（公任集・一三七、輔尹集・六四）が早い例で、『後拾遺集』以後一般化するらしい。家集の記述に拠れば、輔尹も公任と同様に花山院に親近したらしく、花山院歌壇の先進性の一端が窺える（『花山院の生涯』四七ページ参照）。

花山院、位につかせ給ひし年、そははかばかしう人にも知られぬ大学のすけにて侍りしを、あはれなるものなり、いかでとく出だし立てん、仰せごと侍りしころ、秋の月いとをかしきに、その心を人々詠み侍りしに

人知れぬ宿世も今は頼まれぬ月のさやけき世にし会へれば

（輔尹集・一）

○はるのよ―「春の夜」は、八代集に三三例あるが、その詠み方は次のように分類出来る。

闇と梅：四例、夢：一三例、梅：二例、梅と月：四例、

花と月：三例、月：三例、花と夢：二例、花：一例

全体の中では夢が圧倒的に多く、一三例中八例は『新古今集』だが、幻想的なイメージが強い時とされるのだろうか。「花と月」を詠む八代集の例は次のもの。

花の色に光射し添ふ春の夜ぞ木の間の月は見るべかりける

（千載集・春上・七三・上西門院兵衛）

浅緑花もひとつに霞みつつ朧に見ゆる春の夜の月

（新古今集・春上・五六・菅原孝標女）

白波の越ゆるん末の松山は花とや見ゆる春の夜の月

（新古今集・雑上・一四七四・加賀左衛門）

しかし、二二三の題に従えば、次の例が二二三に近い。

月をだにみることもあかぬ春の夜は花のあたりぞおもひやらるる

（重之女集・九）

○月みるそらもなかりけり―「そら」は天空の意と、気持ちを表す。

一七四の語釈参照。「聞く空もなし」(道命集・一二九)

すみなれし昔ににたる春の夜の月と花とを見るそらもなし

(輔親集・九二)

雲のうへの月はながむる空もなし袖にうつれる影を見るまに

(異本相模集・九)

おぼつかない見るそらぞなき春のよのかすみへだつる月のひかりは

(永承六年六条齋院歌合・三五・むさし)

○花のうへのみおもひやられて―「花のうへ」は、花についての意。

後に掲げる道信歌も似た表現だが、「花」に花山院を慕う意が余韻となる。

咲けば散る咲かねば恋し山桜思ひ絶えせぬ花の上かな

(拾遺集・春・三六・中務)

花山院思ひいできこえて

花の木にそでを露けみ小野山の雲の上こそおもひやられる

(道信集・一〇二)

【評】 題に応じて、月夜での花への思いの強さを素直に詠んでいる。

道命に似た表現を持つ最後に掲げた道信歌と合わせて見ると、詠作後の意識かもしれないが、同じように花山院に寄せる思いを読み取るべきかと思われる。

四月にさくらのさけるをみて

224 いくよしもあらしさくらをゆくはるの中々なににのこしおきけん

【校異】 ○さけるを―さける(谷)、○しも―しか(谷)

【他文獻】 続後拾遺集・夏・一五八「おそ桜をみてよみ侍りける」、

題林愚抄・夏上・一六九二。

【現代語訳】 四月に桜の咲いているのを見て

咲いているのは幾夜もないだろう桜を、過ぎてゆく春がその中で、中途半端にどうして残したのだろう。

【語釈】

○四月にさくらのさける―珍しいものとして注目された。

卯月に咲ける桜を見て詠める

あはれてふことをあまたにやらじとや春に遅れてひとり咲くらむ

(古今集・夏・一三六・紀利貞)

四月、祭の日まで花散り残りて侍りける年、その花を使いの

少将の頭挿に賜ふ葉に書き付け侍りける

神代にはありもやしけん桜花けふの挿頭に折れる例は

(新古今集・雑上・一四八五・紫式部)

○いくよしも―「よ」は、「世」もあるが、「いく夜しも」か。

いく世しもあらしと思ふ世の中のえしも心に叶はぬぞ憂き

(好忠集・四五七)

いく夜しも風吹く夜の山里にいやはかなにも散る紅葉かな

(壬三集・三〇二)

○ゆくはるの―擬人法。「行く春が」の意。

行く春の井堰にとまるものならばまつ下り立ちて我ぞせかまし

(源賢法眼集・一二)

花もみな散りぬる宿は行く春のふるさとこそなりぬべらなれ

(拾遺集・春・七七・貫之)

○中々なにに―「中」に「なかなか」を掛ける。「なかなか」は「なまじっか中途半端に」、「なにに」は「どうして……だろう」の意で、

二語を合わせて、無ければ諦めもつくのを、中途半端にあるため心

が悩まされることを責める口吻を表す。

思ひ寝の夢と言ひてもやみなましなかなか何に有りと知りけん

(後撰集・恋四・八七二・読み人知らず)

憂しとても厭ひも果てぬ世の中をなかなか何に思ひ知りけん

(千載集・雑中・一一一四・摂政家丹後)

○のこしおきけん―ここでは、「中々なにに」と合わせて、夏にまで桜の花が残っていることを望ましくないとその思いを込めている。

残り無く散るぞめでたき桜花ありて世の中果ての憂ければ

(古今集・春下・七一・読み人知らず)

春を送りて昨日の如しといふことを

夏衣きていくかにかなりぬらん残れる花は今日も散りつつ

(新古今集・夏・一七八・道濟)

年深き色と知りては初霜の残しおきけむ白菊の花(元真集・五五)

【評】桜がはかなさの故か、あるいはそれに反してか、年間を通して最も愛惜する花であることを前提とし、四月にまで残存すること、花に心を悩ます期間が長くなるため避けたいと詠んだ。『古今集』以来の発想による詠。それは歌人にとって和歌を詠むべき注目される折だったか、赤染衛門も道命とのやり取りを残している。

四月一日までちらぬ桜のありしを、道命阿闍梨にやりし

まだちらぬ花に心をなぐさめて春過ぎぬとも思はざりけり

かへし、阿闍梨

春はさは花よりほかのことやなき野辺の霞のたちもこそきけ

またこれより

をしめどもたちやはとまる春霞ねたしのこれる花を思はん

(赤染衛門集・四〇五〜四〇七)

四月に郭公といふ題をたまはりて花山院にて

225 ひとこゑにおもひをかけてほととぎすさつきまつまはこゝろそら

にも

【校異】 ○四月に―四月(谷)、○花山院―花山(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 四月に時鳥という題をいただいて、花山院で

一声を聞くことに強く期待して、時鳥が五月を待っている間は、浮つて気もそぞろだ。

【語釈】

○四月に郭公といふ題―四月に行われたことが判明する歌合で、時鳥

の題を有するものには『長久二年(一〇四一)四月七日師房歌合』

『天喜四年(一〇五六)四月九日』があるくらいだが、夏のうちに

行われた場合、特に時鳥が鳴くとされる五月に限らずに時鳥題は有

り得るだろう。

四月ついたちの日よめる

桜色に染めし衣を脱ぎ替へて山時鳥けふよりぞ待つ

(後拾遺集・夏・一六五・和泉式部)

四月一日、時鳥待つ心をよめる

昨日まで惜しみし花も忘られて今日は待たるる時鳥かな

(同・同・一六六・藤原明衡)

○花山院―『国史大辞典』に、「近衛大路の南、東洞院大路の東の方

一町。現在の京都御所建礼門と宗像神社の中間の位置。：伊尹女

(九の御方)が住み、そこに花山上皇が通った。その関係で上皇の

御所となり、花山院と呼ばれるようになったのであろう」とある。

○ひとこゑ―時鳥への人の期待を表す定型表現。

夏の夜のふすかとすれば郭公なくひとこゑにあくるしのめ

(古今集・夏・一五六・貫之)

行きやらで山ぢくらしつほととぎす今ひとこゑのきかまほしさに

(拾遺集・夏・一〇六・源公忠)

東路の思ひいでにせんほととぎす老蘇のりのよはの―ひとこゑ

(後拾遺集・夏・一九五・大江公資)

○おもひをかけて―①執着する。：②思慕の情を向ける(『日本国語大辞典』)とあるが、ここは①。主語は人か。

○さつきまつま―時鳥は五月を待って鳴くとされる。ここで主語は人とも考えられるが、次に挙げた用例からも推測して時鳥と見る。

さ月まつ山郭公うちはぶき今もなかなむこそぞのふるこゑ

(古今集・夏・一三七・読み人知らず)

四月廿七日ばかりに

木隠れて五月待つ間は時鳥羽ならはしに枝移りせよ

(伊勢集・四五五)

木隠れて五月待つ間の時鳥しのびて鳴けど声つきぬべし

(元真集・一七九)

○ころそら—うわの空な気持ち。

心のみ空になりつつ時鳥人頼めなる音こそ泣かるれ

(新古今集・恋一・一〇四七・馬内侍)

時鳥ゆくへも知らぬ一声に心空なる五月闇かな (紀伊集・一四)

【評】一首全体を時鳥の心を詠むものとも、同様に人の心を詠むもの

とも解釈することは可能だが、三・四句のみを時鳥、他を人の心とし

て解釈した。時鳥の一声を待ち侘びて、声の聞こえて来るはずの空ば

かりを気にする人の姿が余情。

はらからうせたりし人の御もとに、五月ついたちころ

226 つねよりもいかにまつらんほとゝぎすきみがゆきにしみちのゆか

りに

【校異】 ○いかに—いか、(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 兄弟(姉妹)が亡くなった人の御手許に、五月一日ごろ

送った。

いつもの一声を期待してより、どれほど待つことでしょう、冥界から

行き来するという時鳥を。あの方が去った道の縁で。

【語釈】

○はらからうせたりし人—以下に一四八の詞書を掲げるが、同時期の

作と見る。つまり、道命が兄弟を喪ったと同じころに同様の悲しみ

があった人。

はらからのうせたるころ、又ははらからにおくれておなじ思な

る人に(一四八)

○つねよりも—常日頃の気持ちに比べて強く。

(千載集・哀傷・五八一・鳥羽院御製)

○ほとゝぎす—通常は夏の夜更けに鳴く声を愛でて期待することを歌

うが、ここではこの世と冥土を行き来する鳥としての面から詠まれ

ている。

寝てのみや人は待つらむ時鳥もの思ふ宿は聞かぬ夜ぞなき

(古今集・夏・二〇三・小弁)

時鳥けき鳴く声に驚けば君に別れし時にぞありける

(古今集・哀傷・八四九・貫之)

死出の山越えて来つらむ時鳥恋しき人の上語らなむ

(拾遺集・哀傷・一三〇七・伊勢)

○きみがゆきにしみちのゆかり—死者を旅に出た人に喩え、その道を

時鳥も通るとした。

君が行く越の白山知らねども雪の間に跡は尋ねむ

(古今集・離別・三九一・兼輔)

なく声はおとらじものをほととぎす死出の山路の道しるべせよ

(輔親集・九八)

【評】時鳥を死者を思い起させるものとして詠んだ。和歌を送った人

物及び死者については不明。

あかつきがたにほとゝぎすをきゝて

227 いでやいであかつきがたのほとゝぎすきかぞたゞにあるべかり

ける

【校異】 ○いてやいて―いてやいてや(谷)、○ほとゝぎす―ひとこゑは(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 夜明け直前に時鳥を聞いていやいや、夜明け直前の時鳥は後を引かれるので、聞かずにそのまま過ぎる方がよかった。

【語釈】

○あかつきがたにほとゝぎすをきゝて―八代集で暁の時鳥として表されているものは以下に掲げる五首。夜更けに聞く時鳥は反って一層その声への愛着を増させるものとされる(↓四一、三二二)が、同時に暁の時鳥は恋人の別れの時に重なることで哀感を一層強められているものとも知られる。

時鳥夢かうつつか朝露のおきて別れし暁の声

(古今集・恋三・六四一・読み人知らず)

時鳥一声に明くる夏の夜の暁方やあふごなるらん

(後撰集・夏・一九一・読み人知らず)

時鳥暁方の一声は憂き世の中を過ぐすなりけり

(後撰集・夏・一九七・読み人知らず)

深山出でて夜半にや来つる時鳥暁かけて声の聞こゆる

(拾遺集・夏・一〇一・兼盛)

時鳥暁かけて鳴く声を待ため寝覚めの人や聞くらむ

(詞花集・夏・六〇・伊家)

○いでやいで―「いで」は反発・否定する気持ちを表し、「や」は詠嘆。「いでやいで」は、これを繰り返すことで強調した。「いやはや、もう」。

我をのみ思ふと言へばあるべきをいでや心は大幣にして

(古今集・雑体・一〇四〇)

右の下旬は、「まあいやなことに、あの人の心は引く手あまたの大幣で、頼りにならなくて」の意。

○きかでぞたゞに―聞かないで、そのまま。

聞かてただ寝なましものを時鳥なかなかなりや夜半の一声

(新古今集・夏・二〇三・相模、相模集・四七)

○あるべかりける―あって当然の意で、『古今集』以来の定型表現。

恋しきに命をかふる物ならば死にはやすくぞあるべかりける

(古今集・恋一・五一七・読人知らず)

殿上人の時鳥待つとてありけるに、暁になるまで鳴かざりければ、

待たずこそあるべかりけれ時鳥寝に寝られても明かしつるかな

(実方集・二二三)

【評】 暁方に時鳥を聞いた感想だが、一声聞いてもなお聞きたいとすることは時鳥を詠む和歌の定形的発想。夜更けから時刻が遅くなるほど再度聞くことが難しく満たされぬ思いも深まる状況を詠む。

七月七日に人々歌よむに

228 たなばたのけふをくらさんほどはしもきしかたよりもひさしから

なん

【校異】 ○七月七日に―七月七日(谷)、○ひさしからなん―久しかる覧(書?)ひさしかりなむ(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 七月七日に人々が歌を詠む時に

織姫が今日一日を過ごすという時間は特別で、その日までの日々全部よりも長くあってほしい。

【語釈】

○けふをくらさん―朝から日暮れまでの一日を過ごすこと。

いかにして今日を暮らさむ小ゆるぎの急ぎ出でも甲斐なかりけり

(拾遺集・恋四・八五二・小式命婦)

○きしかた―七月七日までの日々の総計。

○ひさしからなん―一年に一日しかない二星の会う時間が少しでも長いようにと願う。次の中で、七月七日以外の日々の長さを望む点では通房詠が類似する。

秋の夜の心もしるく七夕の会へる今宵は明けずもあらなん

(後撰集・秋上・二三五・読み人知らず)

待ち得たる一夜ばかりを七夕のあひ見ぬ夜半と思はましかば

(後拾遺集・秋上・二四五・通房)

月影を待つに夜更けぬ秋の夜は明るるほどだに久しからなん

(頼実集・八四)

【評】七夕の二星が一年の内では七月七日の一日だけ会うことの短さに、長くあるようにと願うことを詠むのは率直で新鮮だが、説明的とも言える。

七月八日ばかりとぞおぼゆる、よみし

229 わかれにしそのあかつきはたなばたのあひみむほどとおもはましかば

【校異】 ○あかつきは―あか月か(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 七月八日ほどと思われる時に、詠んだ

二星が別れたその早朝は、織姫が彦星に会う時と思えるのなら良いのだが。

【語釈】 ○わかれにしそのあかつき―暁を恋人の別れの時とするのは類型化されている。

有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし

(古今集・恋三・六二五・忠岑)

忘るなよとばかり言ひて別れにしその暁や限りなりけむ

(秋篠月清集・四七〇)

○あひみむほどとおもはましかば―別れの時が、これから会う時であつたら良いのにとの願望。

暁の鐘の声こそ聞こゆなれこれを入相と思はましかば

(後拾遺集・雜二・九一八・小一条院)

いたづらに過ぐる月日を七夕の会ふ夜の数と思はましかば

(拾遺集・秋・一五一・惠慶)

待ち得たる一夜ばかりを七夕のあひ見ぬ夜半と思はましかば

(後拾遺集・秋上・二四五・通房)

【評】七夕後朝を詠む。二星の恋人同士の別れの時を、これから会う時だと思ひ描き望む。

九月ふたつありしとのちの九月に、あきすぎてあきあり

といふ題を人々よみしに

230 わすれてもあるべきものを中々におもひをのこすあきにもあるかな

【校異】 ○ありし―ある(谷)、○九月にあき―九月^本 かは秋(谷)、○おもひ―こころ(谷)、○あきにも―あきも(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 九月が二つあった年の後の九月に、秋過ぎて秋有りとい

う題を人々が詠んだ時に、九月が過ぎて秋を忘れても良いはずなのに、九月が二回あるために、かえって思いを残す秋であることよ。

【語釈】 ○九月ふたつありしとのちの九月―道命の生没年(九七四―一〇

二〇)の間で閏九月があるのは、寛弘元年(一〇〇四)のみ。道命

は三十一歳の時。

○あきすぎてもあきあり―他の文献に同題は見えない。

○わすれてもあるべきものを―「当然、秋のことは忘れるべきなのに」の意。九月が一回で過ぎれば、秋があっけなく終わったことになるはずだとのこと。

忘れてもあるべきものをこのごろの月夜よいたく人な好かせそ

(後拾遺集・誹諧歌・一二二二・義孝)

影少ない宵の月

忘れてもあるべきものをなかなか雲間すくなき月をこそ思へ

(公任集・三三四)

○おもひをのこす―心残りを感ずる、未練を残すの意。ここでは、閏九月があつて、秋が一月だけ長くなつたため思い切りがつかないこと。次の例はどちらも月を見ることで思いを晴らせたとする。

一人ゐて月をながむる秋の夜はなにごとをかはおもひのこさん

(為頼集・一八)

こよひわが桂の里の月を見ておもひのこせることのなきかな

(経信集・一一〇)

○あきにもあるかな―九月が一月延びて、秋への思いが深まったことを表す。

見るごとに秋にもあるかな立田姫紅葉染むとや山も着るらむ

(友則集・二七)

【評】 同題は見えず、内容もユニークな一首。秋が一月延びて馴染んで別れがたいとの思いを詠む。上句は公任詠に重なり、ここでは下句で月への心残りを詠んでいる。二三〇は下句で秋への思いを詠むが、「おもひをのこす」での例二首は月への思いを詠む。それらから推測すると、道命詠も表現では足りないが、秋の月への執着が主眼だったのかもしれない。あるいは、五句の「あき」は「つき」の誤写も想定できる。

もみぢのこるやまでらにあつまりていきたりしに

231 かゝるひはあらじとぞおもふをしらくものみねのもみぢをたちかくすかな

【校異】 ○のこる―のころ(谷)、○あらしとそ―あらしと(谷)、○

おもふを―おもふ(書¹・書²)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 紅葉が散り残っている山寺に、集まって行った時に

このような日はまたとないだろうとばかりに思うが、白雲が峰の紅葉を立ち隠すことだよ。

【語釈】

○かゝるひ―知人達が集まって紅葉を見に行く日のことと解するが、

紅葉を白雲が隠す日とも解せる。「かゝる」は「このような」の意

だが、「架かる」の意で「白雲」と縁語。「かゝる」と「あらじとぞおもふ」との結びつきは定形表現↓二四二。

いづくとも所定めぬ白雲のかからぬ山はあらじとぞ思ふ

(拾遺集・雑恋・一二二七・読み人知らず)

古の海士の住みけん伊勢の海もかかる渚はあらじとぞ思ふ

(采花物語・卷三三・四三〇・兼房)

○しらくも―桜を隠すと詠むことが一般で、紅葉については例外的。

ちはやぶる比良の深山のもみぢ葉にゆふかけたすけさのしら雲

(安法法師集・二八)

○みねのもみぢ―紅葉の定形表現。

筑波嶺の峰のもみぢはおちつもりしるもしらぬもなべてかなしも

(古今集・東歌・一〇九六)

小倉山峰の紅葉葉こころあらば今一度の行幸またなん

(拾遺集・雑秋・一二二八・忠平)

○たちかくす―紅葉については霧が隠すことが一般。雲とともに詠まれることは稀。ここでは、期待した紅葉が見られないことを

惜しんでいる。

紅葉見に宿れる我と知らねばや左保の川霧立ち隠すらん

(拾遺集・秋・一九三・恵慶)

散りぬべき山の紅葉を秋霧のやすくも見せず立ち隠すらん

(同・同・二〇六・貫之)

思ひやるよそのむら雲しくれつつ安達の原に紅葉しぬらん

(新古今集・恋五・二三五一・重之)

【評】 秋の終わるか冬の初めか、まだ木々に残っている紅葉を求め、

山寺に集って出掛けるが、せつかく残っている紅葉を白雲が隠して見

えない。その残念な思いを平明に詠む。

人々あつまりてあそびなどして、かはらけとりてうたよむに

232 いへでせんほどはいくらといざこよひもみちしたらん山へいりな

ん

【校異】 ○いくらと—くらくと(谷)、○したらん—したはん(書)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 人々が集まって管弦を奏でなどして、杯を取って歌を詠

む時に

家を出ようするのにどれほどかかるかと、さあ今夜、紅葉をしている

らしい山へ入ろう。

【語釈】

○あそび—「遊び」は通常、音楽を演奏することとするが、ここでは

具体的には不明。↓五九・六五・八四

○かはらけとりて—八代集では、饗別、もしくは祝宴などの場で「か

はらけ」を取るとする。↓一三三(三〇四)、一九〇(二七〇)

出羽より上りけるに、これかれ馬の餞しけるに、かはらけ取

りて

行く先を知らぬ涙の悲しきはただ目の前に落つるなりけり

(後撰集・離別羈旅・一三三三・源のわたる)

選子内親王、齋院と聞こえける時、正月三日上達部あまた参

りて梅枝といふ歌をうたひて遊びけるに、内よりかはらけ出

だすとて詠み侍りける

降り積もる雪消えがたき山里に春を知らする鶯の声

○いへで—外出の意に出家の意味を込める。

○寂しさに家出しぬべき山里を今夜の月に思ひとまりぬ

憂き世もしほかになしやと家出しを道に入りぬと誰か伝へし

(元輔集・二五三)

○ほどはいくらと—どのくらいの距離か、の意。「それほど遠くない」

の意を込めるか。掲出した元輔歌に準じて推測すれば、戯れて一座

の人々の紅葉を見ることにかこつけて出家を促すか。

暮れはてて春の別れの近ければいくらのほども行かじとぞ思ふ

(伊勢集・一一六)

○いざこよひ—「さあ、今夜はでかけよう」の意。

いざこよひ行方知られじ月見てはあそぶ子てにはかへらざりける

(散木奇歌集・五一二)

○もみちしたらん—「紅葉しているらしい」の意。通常は「紅葉しぬ

らし」「紅葉しにけり」。「したらん」の例は僅少。

暮れに來んといひたる男に

おぼろけの人はこえこぬ組垣をいくへしたらんものならなくに

(和泉式部統集・四〇二)

○山へいりなん—「山へ入ろう」の意。出家を意味する「入山」を示

唆するか。

世を捨てて山に入る人山にても猶憂き時はいつち行くらむ

(古今集・雑下・九五六・躬恒)

【道命阿闍梨集】注釈(八)

(37)

— 37 —

世を捨てて山へ入る人入らましや昔の月のくもらざりせば

(元輔集・一三〇)

【評】人々と管弦を奏で酒杯を交わした勢いに乗って、紅葉狩りに山へ入ろうと言うのだが、「入山」から出家を示唆していると解した。「出家」と「入山」の対句と相俟ち、極めて厳肅であるべき出家をこのように表すところは道命らしい軽妙洒脱さと見るべきだろう。

九月ばかりにもへまうづるに、おほるがはにもみちのながるゝをみて

233 もみちばのゆくへをみればおほるがははくんだりこそあきはすぎけれ

【校異】 ○まうつる―まかる(谷)、○もみちの―もみち(谷)、○すきけれ―ゆきけれ(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 九月ごろにある所に参詣する時に、大井川に紅葉が流れているのを見て

紅葉の葉が流れていく行方を見ると、大井川では、何と川を下って秋が過ぎて行くことよ。

【語釈】

○ものへまうづる―道命集でほかに「まうづ」とされる所は、「鞍馬」(二四、四〇、二二四)、「清水」(一九二、二七二)、「熊野」(一一二)がある。ここは法輪寺在住時の外出の折ということか。

○おほるがはにもみちのながるゝをみて―他にも「水に紅葉のいとおほるながるゝをみて」(一一二)がある。

色々の紅葉流るゝ大井川下は桂の紅葉とや見ん

(拾遺集・秋・二二二・忠岑)

○もみちばのゆくへ―紅葉の葉が流れて行く先。

秋風にあへず散りぬる紅葉葉のゆくへ定めぬ我ぞ悲しき

(古今集・秋下・二八六・読人しらず)

○かはくんだり―「川を下って」の意。名詞としては、二十一代集や私家集・歌合にも見えず、古語辞典での項目もない。現代語として、「上流から下流に向けて川を下ること。木材を筏に組んで運び、また、船に乗って景観を楽しむ。」(広辞苑)とある。

大井川下す筏の水馴れ棹見慣れぬ人も恋しかりけり

(拾遺集・恋一・六三九・読み人知らず)

高瀬舟しぶくばかりに紅葉葉の流れて下る大井川かな

(新古今集・冬・五五六・家経)

川下る鶺鴒船に架くる篝火の見えぬ夜もなき下つ闇かな

(頼政集・一一四)

○あきはすぎけれ―紅葉が川を下り去ることと秋が去ることを重ねた点が一首の趣向。

年ごとに紅葉葉流す立田川みなとや秋のとまりなるらん

(古今集・秋下・三二一・貫之)

九月尽日大井にまかりて詠める

惜しめども四方の紅葉は散り果てて戸無瀬ぞ秋のとまりなりける

(金葉集・秋・二五六・公実)

【評】紅葉が川下に流れて行くとともに秋が去ると見る発想は、すでに『古今集』からあることだが、それを平明になぞっている。

234 もみちばはむかしのいろにかはらねどたゞふるさととなるぞかなしき

一条院にて、もみちのちるをみて禪林寺の僧正の給へる

【校異】 ○ちる―ちりたる(谷)、○禪林寺―せちうし(谷)、○なる

と―なるそ(書₂・谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 一条院で、紅葉が散るのを見て、禪林寺の僧正がおっしゃった

紅葉の葉は、昔の一条天皇が御在世の頃の色に変わらないが、ひどく荒れた邸宅となったことがとても悲しいことだ。

【語釈】

○一条院―京都市上京区飛騨殿町付近。「一条南大宮東二町」（拾芥抄）。藤原伊尹、為光邸を東三条院が伝領。一条天皇から後冷泉天皇まで里内裏となった。一条天皇はここで寛弘八年（一〇一一）六月二十二日に崩御した。

○禪林寺の僧正―「禪林寺」は京都市左京区永観堂町にある現永観堂。

禪林寺に人々まかりて、山家秋晩といふ心を詠み侍りける

暮れ行けば浅茅が原の虫の音も尾上の鹿も声立てつなり

（後拾遺集・秋上・二八一・源頼家）

「禪林寺の僧正」は深覚。天曆九年（九五五）生。長久四年（一〇四三）寂。八十九歳。父は藤原師輔。母は醍醐天皇皇女康子内親王。道命にとって祖父兼家の弟で、師である尋禪の弟（母親は三人とも別）。東寺長者。禪林寺僧正、石山大僧正と号す。師は仁和寺寛忠。『後拾遺集』に三首、『金葉集』に連歌一句入集。その他、『公任集』『赤染衛門集』『経衡集』に和歌が見える。『今鏡』『古事談』『十訓抄』等に、空腹を宝蔵が破壊したと称して藤原頼通から魚菜を得た話や藤原教通の腹痛を困窘をさせて治したなどの説話がある。

あやしげなる下衆をとこの、禪林寺の僧正に、瓜を四つ奉りたりければ

凡夫やつ四果の瓜をぞ得させたる聖のつらにならんと思ふか

（古今著聞集第十八・飲食・六一七）

右で、「四果」は四個の果実に小乗の四種の悟りの結果を懸けた。なお、彼は『僧歴総覧』に拠ると寛仁四年（一〇二〇）十二月三十

『道命阿闍梨集』注釈（八）

日に「僧正」になったとされる。記録で「僧正」とあるのは『左経記』同七月二十六日条に「禪林寺僧正」とあるのが最初で、同記十二月三十日条にも「僧綱召、僧正深覚」とある（『僧伝資料』に拠る）。一方道命の没年時は寛仁四年七月四日だから、『道命集』の詞書は道命自身によるものではないとすべきだろう。

○むかし―一条院が一条天皇の里内裏だった頃。それは一条天皇時代に五回を数える。その後道命存命中では、後一条天皇時代の長和五年（一〇一六）六月二日から寛仁二年（一〇一八）四月二十八日まで（橋本義彦『平安貴族』所収「里内裏沿革考」に拠る）。深覚は一条天皇崩御に際して「御惱危急」から「葬送」「御骨上」に至るまで奉仕していることが『権記』に記されている（『僧伝資料』）。この歌は、その時の記憶が本となり、一条天皇崩御の寛弘八年（一〇一一）六月二十二日から長和五年（一〇一六）六月二日までに詠まれたか。しかし、三保氏は前掲論文（二二二の【評】）で、寛弘元年歌群中の秋の詠作とする。これについては、一三五の【評】に記す。十月ばかりにもへ参り侍りける道に、一条院を過ぐとて、車を引き入れて見侍りければ、火焚屋などの侍りけるを見て詠める

消えにける衛士の焚く火の跡を見て煙となりし君ぞ悲しき

（後拾遺集・哀傷・五九二・赤染衛門）

一条院かくれさせ給うての又の年、かの院の花を見て詠める
桜花見るにも悲しなかなかに今年の春は咲かずぞあらまし

（千載集・哀傷・五五一・源道濟）

思ひ出でて来つるもしるく紅葉葉の色は昔に変はらざりけり

（後撰集・雑四・一三〇一・兼輔）

○ふるさと―一条院の、多くの人々が集った、かつての華やかさが失われ、荒れ果てた状況となつてのこと。三保氏は、「一条院は、もと父師輔の屋敷であるから、文字通り深覚の「ふるさと」である」と述べる。

ふるさととなりにし奈良の都にも色は変はらず花は咲きけり

(古今集・春下・九〇・平城帝)

○なるぞかなしき―底本「と」は「そ」の誤りとして、他本で改めた。

【評】 深覚にとつて一条天皇崩御の記憶は鮮明に残り、後にその地である一条院を訪れた感慨を詠んだものと考えられる。深覚と道命の親交について他は知られない。やはり、同族でもある尋禪との関係に抛るのだろう。

かへし

235 ふるさととおもはぬ人のみるだにもたゞにはあらずやどのもみちば

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 返事

古なじみと思うことのない人が見てさえも見過ごせない御殿の紅葉の美しさよ。

【語釈】

○ふるさととおもはぬ人―一条院を故郷と思わない人。一条天皇崩御に深く関わった深覚に対して、道命を言う。

○たゞにはあらず―ひととおりでではないこと。格別すばらしい。かつての一条院の華やきに特に縁が深くなかった道命にとつても、今見る一条院の紅葉はすばらしい、との意。

妹背山ただにはあらず埋木の匂ふばかりの花ならねども

(出羽弁集・一五)

白河の花をぞ思ふ雨降ればただにもあらで色やまさらん

(公任集・二三〇)

○やどのもみちば―歌語としての例は希少。ここでの「宿」は一条院。

神無月時雨の常か我が背子が宿の紅葉葉ちりぬべく見ゆ

(万葉集・卷十九・四二八三)

山辺より野辺も残さず尋ね来てとまるもしるき宿の紅葉葉

(公任集・一一〇)

【評】 谷山本欠。現在の寂れた館となった一条院だが、眼前の紅葉のすばらしさを強調することで、かつて一条天皇周辺の華やきのすばらしさを彷彿させて讃えた歌と解する。二三四の語釈で示したように成立時期に疑義がある。三保氏は、二三四を父の屋敷だった一条院を訪れた際の詠とし、「②(寛弘八年説)と仮定した場合、…道命の歌は「一条院をふるさととは思わない自分の目にさえも一通りとは見えぬ程美しい紅葉ですよ」とあって、…故院を偲ぶ情を否定したことになり礼を失することはなほだしい。…寛弘元年歌群中の秋に位置することを考慮して元年詠とみるべき」とされる。しかし、一条天皇崩御後の作だとしたら、二三五は「礼を失する」内容となるのだろうか。むしろ、崩御後も在世時に変わらない紅葉の美しさが一条天皇の素晴らしさの永続を寿ぐものと解して良いのではないだろうか。

正月七日すぐして山よりいでたるに、かゞみにつけて人々よみけるに

236 ますかゞがみみですぐしてし身なれどもちとせはきみがかけにかくれん

【校異】 ○正月七日すぐして―七月七日(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 正月七日を過ごして山から出たところ、鏡に寄せて人々が詠んだので

澄んだ鏡を見ないで過ごしてきた私だが、千年の栄えは君の鏡に映った姿に隠れて守られたいものです。

【語釈】

○正月七日すぐして山よりいでたるに―「正月七日」は年中行事として、七草粥の起源である「供若菜」や「白馬の節会」があるのだが、ここでは前の年から山寺（「山」は比叡山か）で「年ごもり」をして後に下山したことを示す。

年ごもりに山寺に侍りけるに、今日はいかがと人の問ひて侍りければ

人知れず入りぬと思ひし甲斐もなく年も山路を越ゆるなりけり

（後拾遺集・春上・六・能宣）

○かゞみにつけて人々よみける―普通の鏡とすれば、正月との関わりは不明。あるいは鏡餅か。

…菌固めの祝ひして、餅鏡をさへ取り寄せて、千歳の蔭にするき祝ひごとどもして、（中略）我はと思ひあがれる 中將の君ぞ「かねても見ゆるなどこそ、鏡の影にも語らひ侍りつれ。…

（源氏物語・初音）

○ますかゞがみみですぐしてし身―「ます鏡」は「真澄鏡・澄み切った鏡」とされる。「ます鏡を見ることなしに過ごして来た我身」とのこと。次の『古今集』歌はその理由か。

行く年の惜しくもあるかなます鏡見る影さへにくれぬと思へば

（古今集・冬・三四二・貫之）

○ちとせはきみがかけにかくれん―道命歌は『古今集』歌に抛り、「君」は詞書の「人々」か、あるいは帝か否か。「君が蔭に隠れん」は「君の鏡に写る姿に寄り添うことで保護され、千歳の長寿をあやかろう」との意。

近江のや鏡の山を立てたればかねてぞ見ゆる君が千歳は

（古今集・神遊びの歌・一〇八六・黒主）

春の日にみかく鏡のくもらねばいほで千歳のかけをこそみめ

（天喜三年六条齋院歌合・一二・武蔵）

くもりなき鏡の光ますくも照らさむかけに隠れざらめや

『道命阿闍梨集』注釈（八）

（後拾遺集・賀・四四三・能信）
永らへて甲斐あることを待つなれや君が千歳の蔭に隠れて

（拾玉集・三五四六）

【評】『古今集』「神遊び歌」にあるように、鏡が千年を保証することの扱える。「きみ」が詞書からは特定できない。

ゆきふる日、むめのはなををりて人のもとに

237 ふるゆきにいまはまがへじむめのはなをりけんそでにほひまさりて

【校異】 ○むめのはなををりて―梅花をりて（谷）、○まかへし―ま

かはし（谷）

【他文献】 なし。

【現代語訳】 雪が降っている日に、梅の花を折って人の許に送った降っている雪に今は間違えることはないでしょう。梅の花を折ったという袖には香りが強まって。

【語釈】

○ゆきふる日、むめのはな…人のもとに―雪の中の梅を新年の初花として愛でて贈り物にする。

正月二十日ころ、雪の降りける朝に、家の梅を折りて俊頼朝

臣につかはしける

咲き初むる梅の立ち枝に降る雪の重なる数を問へところそ思へ

（千載集・春上・一五・俊忠）

○ふるゆきにいまはまがへじ―雪の白さと白梅は紛れがちとされる。

大宰帥大伴卿梅花一首

我が岡に盛りに咲ける梅の花残れる雪を紛へつるかも

（万葉集・卷第八・一六四四）

雪のうちに梅の花を詠める

梅の香の降りおける雪に紛ひせば誰かことごと分きて折らまし

(古今集・冬・三三六・貫之)

同御時、御屏風に

降る雪に色は紛ひぬ梅の花香にこそ似たる物なかりけれ

(拾遺集・春・一四・躬恒)

○むめのはな……まさりて―梅が咲く枝を折った衣の袖に香りが移って広がる様子を言う。

折りつれば袖こそほへ梅花有りとやここにくぐひすのなく

(古今集・春上・三二・読み人知らず)

梅の花折ればこぼれぬ我が袖に匂ひ香うつせ家つとにせん

(後撰集・春上・二八・素性法師)

折りて見る甲斐もあるかな梅の花けふ九重に匂ひまさりて

(拾遺集・雑春・一〇一〇・源寛信)

【評】 雪の白さと白梅の紛れが梅の香りで解消されるとされるとする

伝統的な詠み方を受け継いで示した。

238

やすまさ、きたるに

ふたばなる野べのこまつをひきつれてけふこのもとによろづよは

きぬ

【校異】 ○きたるに―きたる (谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 保昌が来たので詠んだ

二葉の野辺の小松を引き、それをあなたが伴って来て、今日、私のいる木の下に万代の栄が来ました。

【語釈】

○やすまさ―藤原保昌。天徳二年(九五八)〜長元九年(一一三六)。

父は致忠、祖父は元方。母は醍醐天皇皇子源允明女。日向・肥後・大和・丹後・摂津守を歴任。道長家家司。寛弘末か長和始め(一一〇一二)ころ和泉式部を妻とする。

○ふたばなる野べのこまつ―地上に芽を出して間もない幼い松。正月の行事である、長寿を願って野の小松を引く「子日の遊び」を表す。

二葉なる野辺の小松に言寄せて木高くならむ陰をこそ待て

(惠慶集・三九)

○ひきつれて―「引き連れ」て来ることに、小松を引くことを懸ける。

引き連れて今日は子の日の松にまた今千歳をぞ野辺に出でつる

(後拾遺集・春上・二五・和泉式部)

春立てば子の日の松を引き連れていつら祈りし千代のしるしは

(海人手古良集・六七)

○このもと―道命の居所。(遁世者が)旅寝をする所として詠まれることが多い。

佐び人の分きて立ち寄る木のもととは頼む陰なく紅葉散りけり

(古今集・秋下・二九二・遍昭)

世を厭ひ木のもとごとくに立ち寄りてうつぶし染めの麻の衣なり

(古今集・雑体・一〇六八・読み人知らず)

木のもとを住み家とすればおのづから花見る人となりぬべきかな

(詞花集・雑上・二七六・花山院)

『歌ことば歌枕大辞典』では、

…そこに身を寄せるべき陰、頼るべき所として詠まれていくようになる。また、「時ならでははその紅葉散りにけりいかに木のもと寂しかるらん」(拾遺集・哀傷・一二八四・村上天皇)のように「こ」に「子」を掛けた例も見られる。

とある。後者の解も不可能ではないが、「子」をどのように考えるべきかに無理があるので採らない。

○よろづよはきぬ―長寿への祝福を受けたとのこと。保昌が子日の小松を引いて齎したことへの感謝。

【評】ある正月の子日に、保昌が小松を携えて道命の許に挨拶に訪れた折に作られた返札の歌と考える。小松をこのように贈り物とする例は以下のように見られるが、それらからすると保昌は小松に和歌を添えていて、その返歌が二三八だったかと推測される。

む月の初子の日、雪のいたくふりたるに、みくしげ殿の女御、松につけて、この女御に
(斎宮女御集・二一〇)

色このみたる女に、子日の松の根おほかるにさして
(為信集・六九)

正月七日子日なるに、松につけて出羽弁がもとより
(経信集・三)

又はじめてあひたる女に正月一日の日子日の松をつかはすとて
(頼政集・六〇九)

まだねぬ人にやらん、歌よみてとせめしかば、ねのひのこ、
ろを

239 けふもけふねのびのまつはひきつれどまだねをみぬぞかひなかりける

【校異】 ○人に一人のもとに(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 「まだ共寝をしていない人に送るつもりだ、歌を詠んでほしい」と迫ったので、子日の内容を詠んだ

今日は、ちょうどその日だから、子日の松は引き根も見ただけれど、まだ寝ることを見ないのは甲斐がないことだよ。

【語釈】

○まだねぬ人に……とせめしかば―「ある人が『まだ寝ていない人に送りたいのだが、歌を詠んでほしい』と責めたので」の意の代作。

それは、①単に夜更けに起きている人に歌を送ろうというのか、②

恋人で共寝をしていない人に送ろうというのか、二通り考え得るが、後掲の『拾遺集』六四八からは②と思われる。

○けふもけふ―今日を強調する。今日は、ちょうど「寝」と同じ「子」の日だから、とのこと。

年ごろ住み侍りける所離れて、ほかに渡りて、又の年の五月五日に詠める

けふもけふ菖蒲も菖蒲変はらぬに宿こそありし宿とおぼえね
(後拾遺集・夏・二二三・伊勢大輔)

○ねのびのまつはひきつれど―子日の行事は滞りなく済ませたが、の意。

岩の上に生ふる子松も引きつれどなほねがたきは君にぞありける
(拾遺集・恋一・六四八・読み人知らず)

「ねがたき」は、「根堅き」と「寝難き」を掛ける。

○まだねをみぬぞ―「ね」に「根」と「寝」を懸ける。前者は小松の根を表し、後者は前掲の『拾遺集』歌の「なほ寝がたき」に当たり、つれない恋人を恨む意となる。

【評】 現代人からすれば、極めて露骨で下品な依頼で、応じて代作をした道命も同類と言えるが、極めて親しく、お互い冗談を通じる親密な友人関係からの諧謔性本意での和歌として、この時代では容認されたと判断する。

うぐひすのおそくなくとし、人のもとに

240 つれづれとくらしわづらふはるの日になどうぐひすのおとづれもせぬ

【校異】 ○なくとし人のもとに―なくとて(谷)、○つれづれ(谷)

【他文献】 風雅集・春上・四七「鶯のおそく鳴くとてよめる」。

【現代語訳】 鶯が春遅く鳴く年、人の許に送る

することがなく過ごすのに困る春の日に、今年の鶯が遅くまで来て鳴かなかつたように、どうしてあなたは来てくれないのか。

【語釈】

○うぐひすのおそくなくとし―春の慰めである例年とは異なる鶯に寄せて、人への思いを託す。

春過ぎばうとくやならむつれづれを絶えずおとなふ鶯の声

(定頼集・四七)

○つれづれとくらしわづらふ―手持ち無沙汰で、心が満たされず、時を過ごすのに、一人で持て余している状態。

つれづれと思へば長き春の日に頼むことはながめをぞする

(後拾遺集・恋四・七九八・道信)

いかにして過ぎにしかたを過ぐしけんくらしわづらふ昨日今日かな

(千載集・雑上・九六六・定子)

○なごうぐひすのおとづれもせぬ―「おとづれ」は人や風について用いることが多く、鶯の例は僅少。「の」は「のように」の意で、人の訪れのなさを恨み、待ち望む気持ちを表す。次に掲げる『行尊集』で、人を鶯に寓することと同じ用法。

宿りする梅は冬より咲きぬるをなど鶯の春来ては鳴く

(教長集・五三)

来鳴くべき鶯だにも春霞立つや遅きとおとづれやす

(出羽弁集・二)

二月、むまのすけ仲実がもとより

年の内に春立ちぬとは知りぬらんなどおとづれぬ谷の鶯

かへし

やまがつは春立つことも知らぬかな袂のこほり解けぬかぎりは

(行尊集・五三、五四)

【評】 春が深まる中、日々寂しく暮らしている頃に鳴く鶯に慰めを得たことから、音沙汰ない知人を誘うために詠んだか。

241 たまさかにとふにつけてやしりぬらんはるのいたらぬたにのむも
れ木

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】

あなたは、まれに訪れることでわかったでしょうか。私が春の来ない谷の埋もれ木のように見捨てられた身だと。

【語釈】

○たまさかにとふ―めったになく、たまたま訪ねる。

こころざし浅茅が末に置く露のたまさかにとふ人は頼まじ

(金葉集・恋上・四〇八・忠通)

○とふにつけて―「とふ」の主語は、歌を読み掛けている相手。その人物が道命を訪ねた時。

つれづれとながむる空の時鳥とふにつけてぞ音はなかれける

(後撰集・夏・一八五・読み人知らず)

○はるのいたらぬ―他所と異なり、一人恵まれないことを言う。ここでは、道命の家のみが他所と違って、春遅くに鳴く鶯のみが慰めだという意識に基づく。

鶯の鳴く音ばかりぞ聞こえける春の至らぬ人の宿にも

(後拾遺集・春上・二二一・元輔)

○たにのむもれ木―他の人に対して恵まれないことを比喩的に言う表現。

：我が身ぞつひに 朽ちぬべき 谷の埋もれ木 春来とも さて

や止みなむ： (拾遺集・雑下・五七四・兼家)

山下ろしの風は吹けども言の葉も今は散り来ぬ谷の埋もれ木

(義孝集・七五)

【評】 その年、鶯の初音が遅かったことに言寄せ、春も遅く人の訪れ

も途絶えがちで恵まれず、人望もないと身の愁えを訴えた。

(大和物語・第二十一段・三三)

ところの、木のえだのやうにて一尺ばかりなるを、人のもと

に

242 おとにきくこまもろこしはひろくともかゝるところはあらじとぞ

おもふ

こぶしの花を人のもとにやるとて

243

わがやどのこぶしのはなをうちとけてかざしにさすなかまちあやふし

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 山芋が木の枝のようで一尺ほどあるのを、人のところに

送った

名高い高麗や唐土は広くても、このように長い山芋のある土地はないだろうと思うよ。

【語釈】

○ところ―野老。山芋とも。

○おとにきくこま―「高麗(こま)」は古代中国北部と朝鮮半島北部にあった国。ここでは朝鮮半島全体を指す。

音に聞く狛の渡りの瓜作りとなりかくなりなる心かな

(拾遺集・雑下・五五七・朝光)

○もろこし―中国。

世に知らぬ恋する人のためしにはこまもろこしと伝はりやせん

(天喜四年七月六条齋院歌合・一〇・武蔵)

○ところ―「ところ」は「こまもろこし」との縁で土地・場所を言うと同時に、その格別長い野老を懸ける。

春の野にところ求むと言ふなるは二人寝ばかり見出でたりや君

(拾遺集・雑春・一〇三二・賀朝法師)

○かゝる…はあらじとぞおもふ―類例ある定型表現。↓二三二

柏木の森の下草おいのよにかかる思ひはあらじとぞおもふ

【評】 たまたま手に入れた山芋が格別に長大だったことを詠んだ。道命らしい日常生活に密着した俳諧歌的な詠風。

こぶしの花を人のもとにやるとて

243

わがやどのこぶしのはなをうちとけてかざしにさすなかまちあやふし

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 辛夷の花を人に送るということで詠んだ

我が家の辛夷の花を油断して挿頭として髪に挿すな。拳が当たったら頬骨が危ないぞ。

【語釈】

○こぶしの花―辛夷の花。早春に白い花を咲かせる。和歌での例は極めて少ない。拳を連想させることが和歌の内容になる。

こぶしの花を人のもとへつかはすとて

時しあれば辛夷の花も開けけり君が握れる手のかかれかし

(続詞花集・戯笑・九八二・読み人知らず)

うち耐えて手を握りたる辛夷の木心せばさを嘆くころかな

(夫木抄・卷二十九・一四〇七三・こぶし・為家)

○かまちあやふし―「輔(かまち)」は「かばち」と同じで、それは、「頬骨からおとがいにかけての骨格」(日本国語大辞典)。「つらがまち」とも言う。和歌での用例は他にない。辛夷は拳(こぶし)を懸

け、挿頭にするると辛夷の花が拳になって輔を折ると戯れた。

【評】 三保サト子氏が「辛夷の花から人間の拳を連想し、「こぶし」なら輔(かまち)が危ないよと戯れたもの」(「道命の歌―道綱母と花山院の存在を通して―」(仁愛女子短期大学紀要第17号 一九

八六年三月)と解を示されたことに従う。日常生活への関わりから、戯れて詠んで人に送ったもの。雅な和歌世界からは逸脱した内容。

かへし

244 つよからぬこぶしの花はうちかへし人にをらるゝものとしらなん

【校異】 ○おらるゝ―おらなん(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 返事

強くない拳と同じ辛夷の花は、逆に人に折られるものだと思ってほしい。

【語釈】

○つよからぬこぶしの花―第四句の「人に折らるる」と重ね、堅く結ばれた拳ではないことを言う。

○うちかへし―①繰り返し。何度も。②逆に。改めて。ここで②の意味か。

○人にをらるゝ―人に折り取られ、我がものとされること。辛夷の花は擬人化されて、諧謔的な返歌となっている。

二葉より我が標結ひし撫子の花のさかりを人に折らすな
(後撰集・夏・一八三・読み人知らず)

枝もなく人に折らるる女郎花根をだに残せ植ゑし我がため
(後撰集・恋四・八四四・平まれよ)

秋の野の花のなたてに女郎花かりそめにみむ人にをらるな
(伊勢集・一八七)

【評】 贈歌で「辛夷」は「拳」だから、「かまちあやふし」とあるのに、強くない「辛夷」は人の思いのままにされると反論した。二首で、辛夷に道命を寓しているとも考えられる。

245 かねにさくらのはなをさしたるを
あだにちるさくらなりともよろづ代のかめにさしてはひさしかり
なむ

【校異】 和歌本文は底本・書陵部二本欠。谷山本に抛り補う。○はなを―花(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 瓶に桜の花を挿したのをはかなく散る桜であっても、万代の命ある亀と同じ瓶に挿してからは長く咲くことだろう。

【語釈】

○かめにさくらのはなをさしたるを―『枕草子』にも例があるほか、和歌にも多い。歌中では、「瓶」に長寿の象徴である「亀」を懸ける例が多い。

染殿の後の御前に花瓶に桜の花を挿させ給へるを見て詠める
年経れば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

(古今集・春上・五一・良房)

桜の花の瓶に挿せりけるが散りけるを見て、中務につかはしける

久しかれあだに散るなと桜花瓶に挿せれど移ろひにけり
返し

千代経べき瓶に挿せれど桜花とまらむことは常にやはあらぬ
(後撰集・春下・八二六・八三・貫之、中務)

またの日、宰相の君、里より花びら大きな桜を瓶に挿して
君が代はのどかなるべし亀山に桜の花の匂ひことなり

返し、馬

君が代に桜の花はかめ山にさして匂ひのまさるべきかな

(大斎院前の御集・三三六、三三七)

女院のうちにおはしましし時、御堂の前に瓶に桜を挿させ給

へりしが、久しく散らざりしかば

尽きもせず通ひ久しき亀山の桜は風も散らさざりけり

(伊勢大輔集・一六)

○あだにちる―花の属性として一般的。

枝よりもあだに散りにし花なれば落ちて水の泡とこそなれ

(古今集・春下・八一・菅野高世)

定めなくあだに散りぬる花よりは常盤の松の色をやは見ぬ

(後撰集・恋一・五九六・源信明)

○よろづ代のかめ―「瓶」から同音の「亀」を導き長寿を確信する。

万代に千代の重ねて見ゆるかな亀の岡なる松の緑は

(後拾遺集・賀・四五八・資業)

千歳経る鶴のありけむ方にやは今日万代の亀を住ませむ

(元真集・一五六)

【評】 類例に同じ発想に従って賀意を詠んだ一首。『後撰集』の貫之歌に対して、その前段階での予測・願望とも言える内容。

246 ふるくありし所の花をりて人のおこせたりし
たてながらとおもひしものをさくら花おもひのほかにおもひける
かな

【校異】 詞書は、底本・書陵部二本欠。谷山本に抛り補う。○たて―

【他文献】 なし。

【現代語訳】 昔いた所の花を折って人がよこしたので詠んだ
その地に立ったままと思つたのに、折つた桜の花とは。予想外のこと
と思つたことだよ。

【語釈】

○ふるくありし所―道命がかつて居た場所。

○たてながら―地面に立ったまま。次の遍昭の歌に抛るか。

やよひばかりの花の盛りに道まかりけるに

折りつればたぶさに汚る立てながら三世の仏に花奉る

(後撰集・春下・一二三・遍昭)

立ちながら花見くらすも同じこと折りて帰らん野辺の早蕨

(好忠集・三七八)

○おもひのほかに―予想外にも。ここでは、かつて立っているままで
見た桜が、折り取られて見られることになることについて言ってい
る。

我が宿の梅の立ち枝や見えつらん思ひのほかに君が来ませる

(拾遺集・春・一五・兼盛)

【評】 初句が何を意味するか不明瞭だが、遍昭歌から類推すれば、汚
れない状態ということだろう。花が折られたことを意外でもあり、
残念だということを主張するか。

247 三月のつごもり、ほとゝぎすをきゝて
またでこそあらまほしけれほとゝぎすおもひもかけぬこゝろそら
なる

【校異】 ○三月のつごもり―三月晦日(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 三月末日、時鳥の鳴き声を聞いて
待たずに聞けることが正に望ましいよ。時鳥の声を予期もしていない
で聞いた心はもう夢中だよ。

【語釈】

○三月のつごもり、ほとゝぎすをきゝて―次の定頼歌と関連強い。二
人の交友から詠まれたか。

三月尽日に時鳥の鳴くを聞きて詠み侍りける

時鳥思ひもかけぬ春鳴けば今年ぞ待たて初音聞きつる

(後拾遺集・春下・一六二・定頼)

三月尽日、惜春心を人々詠み侍りけるに詠める

時鳥鳴かずは鳴かずいかにして暮れ行く春をまだも加えん

(同・同・一六三・能宣)

○またでこそあらまほしけれ―通常なら期待し待ち侘びるのだが、ここでは待ち始める以前に意外にも早々に時鳥の声を聞くことができ、それが常に増して嬉しく思われたことから、このように言ったか。

「あらまほしけれ」↓「四二」。

待たずこそあるべかりけれ時鳥寝に寝られてもあかしつるかな

(実方集・一一三)

右は夏になって時鳥の声を聞けずに夜を明かしてしまったことによる感慨。表現は重なるが、内容は道命とは異なる。

○おもひもかけぬ―時期以前なので、まだ時鳥を「待つ」こともしておらず、心の準備ができていないこと。

待つともかばかりこそはあらまほしけれ秋の夕暮

(千載集・恋四・八四四・和泉式部)

○こゝろそらなる―「心空なる」は現実に対して上の空になり、ある一事に、ここでは時鳥に心が奪われた状態。「待つ」こともしていない状態から、突如聞こえた時鳥の一声で、一瞬のうちに心が高まったことを言うか。↓三六(雁の声)、二二五(時鳥)、二四九(時鳥)、三〇二(月)

心のみ空になりつつ時鳥人頼めなる音こそ泣かるれ

(新古今集・恋一・一〇四七・馬内侍)

【評】時鳥が本格的に鳴くのは五月だから、忍び音とされる四月をも遡る季節外れの時鳥を詠む。道命と関わりがあった定頼詠との重なりも大きい。

ほとぎすをきゝて、山ざとにいひやる

248 われをこそとはまうくともみやこ人やまほとゝぎすきゝにいらなん

【校異】 ○とはまうく―といまうく(書₂)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 時鳥の声を聞いて、山里に言いやる

私を特に訪いづらいつても、都人よ、山時鳥を聞きに入ってほしいです。

【語釈】

○山ざとにいひやる―道命集で「山里」は歌中で五例、詞書では七例あるが、この二四八以外は、すべて作者である道命の居所とされる。

この歌の内容も、山里にいる身で都人に詠み贈ったものと思われ、詞書は「……山ざとにていひやる」の誤りではないだろうか。あるいは詞書に誤りはなく、たまたま山里に都人がいる時に贈ったものと考えるべきだろうか。しかし、それは不自然に思われる。

○われをこそ―何らかの面で自分が他と異なることからの物言い。

我をこそ訪ふに憂からめ春霞花につけても立ち寄らぬかな

(後撰集・春下・一一三・読み人知らず)

○とはまうく―「まうく」は終止形「まうし」の助動詞連用形。希望しない意を表す。道命がなぜそのように思っているかは不明。都人と自分とに隔絶感を持っているということか。↓二〇(来まうさ)、五一(山時鳥来まうく)。

○みやこ人―都にいて時鳥の声を聞けない人を思いやっている。

都人寝て待つらめや時鳥今ぞ山辺を鳴きて出づなる

(拾遺集・夏・一〇二・道綱母)

山里の甲斐こそなけれ時鳥都の人もかくや待つらむ

(詞花集・夏・五八・道命)

○きゝいらなん―こは、都人を山時鳥の鳴く山地に誘う。

都人来ても折らなん蛙鳴く縣の井戸の山吹の花

(後撰集・春下・一〇四・橘のきむひらが女)

【評】 内容は、時鳥の魅力を人に分かとうとするもの。【語釈】に示したように、都人に送った歌としては、詞書が適合しない。山里にいる道命から都に送ったものとすべきだろう。

ほとゝぎすまつとてある所を、いそぎてほかへいくほどによりみてとらする

249 われならでまつ人やあるとほとゝぎすこゝろもそらになきてわかれる、

【校異】 ○ほとに―人に(書²・谷)、○あると―ありと(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 時鳥が鳴くのを待つためにいる所を、急いで他所に行く

時に詠んで渡す

私以外に待つ人はいないと時鳥よ、私の心も時鳥の空を思い、行く先のことは上の空で、泣いて別れるよ。

【語釈】

○いそぎてほかへいくほどに―底本の本文だと道命自身が出掛け、そこに残った人に歌を詠んだと解せるが、谷山本等によれば「ほかへ行く」のは、道命と共にいて時鳥を待っていた人となる。上句からは道命が時鳥を待つことを止めると解されるので、他所に移るのは道命とすべきだろう。

○われならでまつ人やあるとほとゝぎす―自分(道命)以外には時鳥を待つ人がいないと、の意。

山がつと人は言へども時鳥待つ初声は我のみぞ聞く

(拾遺集・夏・一〇三・是則)

○ほとゝぎすこゝろもそらになきてわかるゝ―待っている時鳥のことを思って心が虚ろな状態になり、時鳥ならぬ我が泣きつつ、後ろ髪を引かれながら別れ去る、との意。

心のみ空になりつつ時鳥人頼めなる音こそ泣かるれ

(新古今集・恋一・一〇四七・馬内侍)

【評】 時鳥の一声を待って過ごしている時に、道命が中座せざるを得ない状況で、その座をともししている同好の人に詠んだ歌か。上句で、道命の時鳥への愛着が他の人の追隨を許さないことを示す。時鳥に格別な思いを持って多くの和歌を詠み残した道命の心の原点を示す一首か。

返歎

250 わがたのむきみよりほかにほとゝぎすことかたらはん人だにもなし

【校異】 ○たに―なに(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 返事か

私が頼りにするあなた以外に、時鳥が親しく話す人さえいません。

【語釈】

○きみよりほかに―「君」は道命。道命こそ格別だと評価した。

霜牙ゆる二見の浦の鴛鴦の上を君よりほかに誰か払はん

(小大君集・一三六)

○ことかたらはん―時鳥が主語。時鳥と道命(君)の親密さを示す。いかにしてこと語らはん時鳥嘆きの下に泣けば甲斐なし

(後撰集・恋六・一〇二〇・読み人知らず)

○人だにもなし―道命以外に同様の人が一人もないとのこと。見にと来る人だにもなし我が宿のはひりの柳下払へども

(和泉式部集・一六)

【評】時鳥の声をともに待っている道命にとつての親しい知り合いによる返歌か。道命が他の人に抜きんでて時鳥に親しんでいることを認め、道命なしでは時鳥も近づかず、声を聞けないとの不安を示したと解する。

251 ほとゝぎす夏きぬなりといふなれどけちかきこゑをまだきかぬかな

【校異】 谷山本欠。なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】

時鳥は、夏が来て馴染んだと言うようだが、間近な声をまだ聞いてないよ。

【語釈】

○ほとゝぎす夏きぬ―「夏来ぬ」に「懐きぬ」を懸け、「時鳥よ、夏が既に訪れ、親しみを感じさせると言うけれど」との意で、下句と対照させるか。

見慣れたる女に、又もの言はむとてまかりたりけれど、声はしながら隠れければつかはしける

時鳥なつきそめてし甲斐もなく声をよそにも聞き渡るかな

(後撰集・恋五・九一一・読み人知らず)

夏来ぬといぶきの山の時鳥そそや鳴くなりあさなあさなに

(千類集・一九)

○けちかきこゑ―時鳥を擬人化し、距離の近さと同時に心理的な親しみのあることを言う。

大輔につかはしける

今は早深山を出でて時鳥け近き声を我に聞かせよ

(後撰集・恋五・九五〇・実頼、清慎公集・四三)

○まだきかぬかな―現在まで自分は聞いていないとのこと。

松山は変はらぬ色し高ければ波越すことをまだ聞かぬかな

(清慎公集・六二)

【評】時鳥を擬人化し、「夏きぬ」の掛詞を出発に、その「懐く」に反して夏の鳥である時鳥をまだ聞けないと詠んだ。『後撰集』九一二にほぼ做った内容だが、時鳥に思い入れのある道命らしい一首か。詞書が欠落したかと思われるが、このまま二五〇に続いているのなら、作者は道命ではないことになり、二五〇の内容を確認していることになる。

四月ばかり、うぐひすをきゝて

252 春すぎてなくうぐひすの声きけばいとゞもつらきほとゝぎすかな

【校異】 ○うぐひすをきゝて―聞鶯て(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 四月ごろ、鶯の声を聞いて

春が過ぎて鳴く鶯の声を聞くと、ますます情がないと思える時鳥だよ。

【語釈】

○春すぎてなくうぐひす―和歌では春の鳥とされるが、実際には珍しいことではない。

卯の花を散りにし梅に紛へてや夏の垣根に鶯の鳴く

(拾遺集・夏・八九・平公誠)

春すぎばうとくやならむつれづれをたえずおとなふ鶯の声

(定頼集・四七)

残なく春の日かずは過ぎぬれどなほ鶯ぞたえずおとなふ

(永久百首・春・残鶯・一一八・常陸)

…夏秋の末までも老い声に鳴きて、「虫食い」など良うもあらぬ

者は、名を付け変へて言ふぞ口惜しくすしき心地する。それもただ雀などのやうに常にある鳥ならばさもおほゆまし。春鳴くゆゑこそはあらめ。：なほ、春のうち鳴からましかば、いかにをかからまし。：祭のかへさ見るとて、雲林院・知足院などの前に車を立てたれば、時鳥も忍ばぬにやあらむ鳴くに、いとようまねび似せて、木高き木どものなかに、諸声に鳴きたるこそ、さすがにをかしかれ。(枕草子・鳥は)

○なくうぐひすの声きけば―定形的に用いられた表現。

梅が枝に鳴く鶯の声聞けば吉野の山に降れる白雪(躬恒集・九六)入り日射し鳴く鶯の声聞けば露の我身ぞ悲しかりける

(好忠集・一三四)

○いとゞもつらきほとゝぎすかな―「いとど」は程度のはなほだしいことを表す。時鳥について、日頃から情が薄いと思っていたのが、鶯との比較で一層「つらし」、つまり薄情だ、つれないと訴えた。

春過ぎてまで鳴いて人を楽しませる鶯と比較して、定まった時期の五月以前では鳴かない時鳥に対して言う。時鳥を擬人化し、恋人に向かって拗ねて責めるような表現と解すべきだろう。

つらしともいかが恨みむ時鳥我が宿近く鳴く声はせて

(後撰集・恋一・五四七・源頼が女)

ねぬままに思へばつらし時鳥いつかはまたで一声も聞く

(寛治五年藤原親子歌合・郭公・一一)

【評】鶯に比べて時鳥を「つらし」と言うが、これも道命の時鳥への愛情表現である。『枕草子』では、鶯に対して時鳥を、「六月になりぬれば、音もせずなりぬる、すべて言ふもおろかなり」と時期を限って鳴くことが潔いと賞賛する。道命は長く鳴く鶯を羨み、時期を限る時鳥を責めるのである。

四月ゆふぐれにほとゝぎすまつとて

253 神まつるうづきにならばほとゝぎすゆふかけてやはなきてわたらぬ

【校異】 ○ほとゝぎすまつとて―ほとゝぎすを(谷)、○ならば―

なれは(書²・谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 四月の夕暮れに時鳥が鳴くのを待つということ

神祭をする卯月になったら時鳥よ、木綿を櫛に掛けて祭る時だから、夕方から鳴いて渡ってほしいよ。

【語釈】

○四月ゆふぐれにほとゝぎすまつとて―時鳥は五月に鳴くもので、夜になって声を聞くものだが、四月の忍び音を待ちかねて言った。

四月朔日、詠み侍りける

春は惜し時鳥はた聞かまほし思ひわづらふ静心かな

(拾遺集・雑春・一〇六六・元輔)

四月ついたちの日よめる

桜色に染めし衣を脱ぎ変へて山時鳥今日よりぞ待つ

(後拾遺集・夏・一六五・和泉式部)

○神まつるうづき―賀茂神社では、四月中西の日に祭が催されるので、その時期だろう。月次屏風の題にも見られ、「車にのれる人かにもにまうづ」(貫之集・一三〇)、「四月かもまうで」(同・四〇一)、「四月みあれひく」(中務集・三八)、「四月、まつりのつかひたつる所」(道濟集・七八)などがある。

神祭る卯月に咲ける卯花は白くもきねが白けたるかな

(拾遺集・夏・九一・躬恒)

○ほとゝぎすゆふかけて―「木綿(ゆふ)」は神事に用い、櫛の皮を細かく裂いて糸状にしたもので幣帛として櫛にかけた。「夕かけて」を掛ける。

神まつりをよめる

榊とる夏の山路や遠からむゆふかけてのみまつる神かな

(詞花集・夏・五四・源兼昌)

ことわりや三輪の社の時鳥ゆふかけてこそ鳴き渡りけれ

(江帥集・四六五)

ゆふかけていづちゆくらむ時鳥なび山にいまぞなくなる

(永久四年院北面和歌合・一一・仲実)

○やはなきてわたらぬ―「やは…ぬ」は誘いかけ。「…してくれたらよいのに」。

ことならば咲かずやはあらぬ桜花見る我さへにしづ心なし

(古今集・春下・八二・貫之)

【評】 四月の夕暮れという時に、季節に先駆けて時鳥を待つということとを、神祭と木綿とに結び付けて技巧を凝らして詠んだ。

あるところより、ふたゝびばかりめししに、さはりごとありて、まぬらざりしかば

254 またせつゝよをかさねてしつらさをばいひにはいはずいかゞおもはぬ

【校異】 さはり―さはる(書¹・書²) さわる(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 ある方から、二度ほどお呼びがあったが、都合の悪いことがあって、参上しなかったの

人を待たせたまま夜を重ねたあなたの情のなさを、責めることもせず、何とも思わないでしょうか。そんなことはないです。

【語釈】

○あるところ―高貴なところか。

○またせつゝ―道命が相手(二五四の作者)を待たせたこと。

待たせつゝ遅く桜の花により四方の山辺に心をぞやる

(和泉式部集・一七五、同続集・四三三)

○よをかさねてしつらさ―道命が幾夜も「召し」に応じなかったつれなき。

○いひにはいはず―言葉で言うことなしに。ここでは道命を責めて言うことはしない。

慎ましきことあれば日頃も言はざりつる、と言ふ人に

つつむとは言ひにも言はで程経ればただ池水の絶ゆるとぞ見る

(和泉式部続集・五一七)

たまさかに会ひて、物をだに言ひあへず言ひたるに

会ふことよろづまさらぬ物ならば言ひには言はで思ひにぞ思ふ

(和泉式部続集・五五六)

○いかゞおもはぬ―「何とも思わないか、そんなことはない」の意。

春の夜の闇に心の惑へども残れる花をいかが思はぬ

(実方集・三一六)

【評】 二度のお召しに応じなかった道命への、先方からの不審と咎めを表した和歌。道命にはやむを得ない事情があって心ならずも不義理な行いになったのか、むしろ参上しづらい気持ちが行先したのかは不明瞭。

御返

255 きみよりはみじかきしなのわれなればのべやるかたのなくもあるかな

【校異】 ○なれは―ならば(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 御返事

あなたよりは低い身分の私なので、短いものを伸ばすようには、述べ

る方法もないのです。

【語釈】

○みじかきしな一位が低いこと。和歌の例は他に見えず。二五四にも「召す」とあり、相手と道命とは身分差があったらしい。

…もとの品高く生まれながら、身は沈み位短くて…

(源氏物語・帚木)

○のべやる―「述べ遣る」の意だが、「伸べ」を掛け、それが「短き」の縁語。下句は、返答する方法がないとのこと。

明日よりは時雨にかかる花を植ゑて伸べやるべくもあらぬ秋かな

(順集・二五八)

【評】 参上しない理由を答えたが、道命としても、単に和歌としても珍しい妙に卑屈な返答に見える。むしろ、「のべ」の掛詞による諧謔性の軽さを見るべきか。

いちまつりごとみて、人々のかのよのことおもひやりしに、
よめりし

256 はかなくも人のうへにてみゆるかなあのよこのよのへだてばかり
に

【校異】 ○みゆる―おもふ(谷)、○へだてばかりに―へだてばかり
を(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 着鉢の政を見て、人々が死後のことを思いやったので、
詠んだ

人生をむなししいことも囚人達の様子で見たよ。来世と現世との境
があるだけで。

【語釈】

○いちまつりごと―「着鉢の政(ちやくだのまつりごと)」のこと。

「徒(す)罪の未決囚に刑具である鉢をつけ、服役せしめる儀式。：
毎年、五月・十二月に日を択んで行われ、使庁の佐以下が出席し、
看督長(かどのおき)に命じて囚に鉢をつけしめる。：政を行う場
所は、『西宮記』二二によれば、長保年代以前は、東西両市であっ
たが、西市の衰えとともに、東市のみとなった。：」(国史大辞典)。

『西宮記』二二に詳しい。『年中行事絵巻』参照。

廿七日、庚午、此日市政也、着彼所令召檢非違使等、：

(御堂関白記・長和五年五月廿七日条)

○人々のかのよのことおもひやりし―「かのよ」は、死後の世界。来
世。「あの世」に同じ。「人々が囚人のさいなまれる様子を地獄
の業苦のようだと思像した」とのこと。

○はかなくも―「はかなし」は①心細い、②あつけない、③むなししい、

④たいしたこともない、⑤粗末である、⑥幼い、⑦あさはかだ、な
どの意味があるが、ここでは②あるいは③と見る。着鉢の囚人の悲
惨な様を見て、この世に生きることが頼り無く、あつけないことと
思った。

○人のうへ―他人に関する事。囚人の様子。

○あのよこのよのへだてばかりに―「来世と現世の違いだけで」との
意。「はかなくも…」に続く倒置。

：かく数ならず思はれたりとならば、この世にも、あの世にも深
くつらしと思はん
(宇津保物語 国護下)

【評】 一首は、囚人の惨めな様子が、この世の事でありながら、あの
世である地獄の様子に見えて、この世もあの世も苦しみには差はなく、
僅かな隔てがあるだけと観じたものか。人にとって来世は、現世と紙
一重の隔てしかなく、厳しい裁きを受ける場であると眼前に突き付け
られた状況を詠んでいるのだろう。道命には珍しい仏教的な和歌だが、
抽象的な教義ではなく世俗的な場での実感として詠んでいる点では道
命らしいと思われる。三保サト子氏の論文(二二二)【評】(参照)で
も、「：…道命の歌は決して他人事とは見ていない。来世では我身の上

に待っているかもしれない境涯と観じているのである」と述べられている。

山ざとにて、よるのひたのおとをきよて

257 あしひきの山田のひたのおとたかみこゝろにもあらぬねざめをぞする

【校異】 ○山田―やま(谷)

【他文献】 玉葉集・雑三・二二四四、万代集・雑一・二八九〇。

【現代語訳】 山里で、夜に鳴る引板の音を聞いて

山田で鳴る引板の音が大きいので、望みもしない寢覚をするよ。

【語釈】

○ひた―引板。「田や畑に張り渡して鳥などを追うための仕掛け。細い竹の管を板にぶら下げ、引けばなるように仕掛けたもの。鳴子」(日本国語大辞典)。

あしひきの山田のひたのひたぶるに忘るる人をおどろかすかな

(古今六帖第五・二八八六)

宿近き山田の引板に手もかけで吹く秋風に任せてぞ見る

(後拾遺集・秋下・三六九・頼家)

「夜の引板」の例もある。

寝たる間も露や置きつつしほらん引板うちはへて守る山田を

(好忠集・二二〇)

田上にて山田の方に鹿おどろかす音に目を覚まして詠める

小夜更けて山田の引板に声聞けば鹿ならぬ身もおどろかれけり

(散木奇歌集・四四一)

○こゝろにもあらぬ―予測したり、期待していたわけでもない。

板間あらみ荒れたる宿のさびしきは心にもあらぬ月を見るかな

(後拾遺集・雑一・八四六・清仁親王)

○ねざめ―「：寢覚めして、ほととぎす、千鳥などの鳥の声や嵐の音などを聞いたり、月をながめたりすると詠まれることが多い。：恋の物思いや冬の夜の寒さ、あるいは老年のため寢覚めするとも詠まれる」(歌ことば歌枕大辞典)。引板の音による寢覚を詠む和歌は他に例がない。

里人の衣うつなる樋のおとにあやなく我もねざめぬるかな

(和泉式部集・四六)

【評】 山里での侘び住いによる閑寂の境地の新鮮さを詠んだ。

七月七日、あるやむごとなき所に、ひさしうまるらで、たてまつる

258 ひこぼしのとしにひとたびあふことをくものよそにもきゝわたるかな

【校異】 ○よそにも―よそとも(書₂・谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 七月七日に、ある身分高い人のもとに、長く参上しない

でいて差し上げた

彦星が年に一回織姫に会うことを、私には雲の彼方のこととして、縁のないことと聞き続けてきました。

【語釈】

○やむごとなき所―高貴な所。

もの思ひ侍りけるころ、やむごとなき高き所よりはせたま

へりければ

うれしきも憂きも心はひとつにて分かれぬ物は涙なりけり

(後撰集・雑一・一一八八・よみ人しらす)

やむごとなき所にさぶらひける女のもとに、秋ごろ忍びてま

からむと、男のいひければ

秋萩の花もうゑおかぬ宿なればしか立ちよらむ所だになし

(拾遺集・雜恋・一二三三・よみ人しらず)

○としにひとたび一希だが、確実に保証されている回数。

契りけむ心ぞつらき七夕の年にひとたび会ふは会ふかは

(古今集・秋上・一七八・興風)

○くものよそ―「よそ」は無縁。「雲」は彦星の縁語であると同時に、

相手が「やむごとなき所」なので、このように言った。

陽明門院はじめて后に立たせ給ひけるを聞きて

紫の雲のよそなる身なれども立つと聞くこそ嬉しかりけれ

(後拾遺集・賀・四六〇・江侍従)

○きゝわたるかな―「渡る」は彦星の縁語。

彦星の川瀬を渡るさを船のい行きて泊てむ河津しおもほゆ

(万葉集・卷一〇・二〇九五)

時鳥なつきそめてし甲斐もなく声をよそにも聞き渡るかな

(後撰集・恋五・九一一・読み人知らず)

今日とだにちぎらぬ中はあふ坂を雲井にとのみ聞きわたるかな

(馬内侍集・六〇)

【評】 牽牛・織女は天の川を挟んで年に一度の逢瀬があるが、相手の

身分が、天の川の隔て以上に高すぎるために遠慮されるのだと、無沙

汰を続けていることへの言い訳を述べた。

かへし

259 よゝをかけちぎらぬなかのかひなきはたなばたつめにおとるなり

けり

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 返事

長年にもわたって、会うと約束をしていない仲の甲斐がないのは、一年に一回会える七夕にも劣ることなのでしょうね。

【語釈】

○ちぎらぬなか―親密さを約束していない間柄。

また七月七日に

けふとだに契らぬ仲は逢坂を雲井にとのみ聞き渡るかな

(馬内侍集・六〇)

七月七日、待つ人のもとに言ひやる

その程と契らぬ仲は昨日までけふをゆかしと思ひけるかな

(和泉式部集・二六五、同続集・二五二)

第四句「けふをゆゆしと」

○たなばたつめにおとるなりけり―牽牛・織女なら年に一回の逢瀬が

約束されているが、その約束すらない状態を言う。

五月五日

けふごとに軒のつまなる菖蒲草たなばたつめに劣らざりけり

(公任集・八〇)

【評】 長い期間に渡っても親密な仲ではないため、七夕のような年に

一度の逢瀬もないのだと嘆き、道命を責めている。

ある人の、子うしなひたるにやる

260 はかなきはすべてこのよのことなれどきみいかばかり思しるらん

【校異】 なし。

【他文献】 なし。

【現代語訳】 ある人が子供を亡くしたのに送った

はかなきとは、子供の生涯も含めて、すべて現世に付き物のことで

す、今あなたはどれほど深く命のはかなさを痛感していることでは

うか。お悔やみ申し上げます。

【語釈】

○はかなきはすべてこのよ―「はかなき」は、二五六参照。あつけないこと。むなしき。ここでは詞書にある子供の死を指す。二句まで含めて、現世を仮のものとする仏教思想に基づく表現。

小山田の守るも守らぬも世の人のすべては仮の宿なりけり

(和泉式部集・三五七)

○このよのこと―現世に限られること。来世にはない。「此の世」に「子の世」(子供の運命、子供の生涯)を懸ける。

子に後れて侍りけるころ、夢に見て詠み侍りける

うたた寝のこの世の夢のはかなきに覚めぬやがての命ともがな

(後拾遺集・哀傷・五六四・実方)

世の中に経じなど思ふころ、幼き子供のあつて

憂き世をば厭ひながらもいかでかはこの世のことを思ひ捨つべき

(和泉式部統集・三二三)

○きみいかばかり―我が子を喪った「ある人の」の悲しみの大きさを想像する。

いかばかり君嘆くらん数ならぬ身だに時雨し秋の哀れを

(後拾遺集・哀傷・五五一・前中宮出雲)

【評】 仏教によって、この世の全ては無常だとの観念はあっても、親が子を喪う悲しみは例えようもなく慰めることもできない。親の悲しみを共感し分かつことで、最低限の癒やしを示そうとした。

かへし

261 をしからぬ身はつゆよりもきえなくてはかなきことをみるぞかな

しき

【校異】 ○きえなく―きえなくて(書1・書2・谷)、○かなしき―

わひしき(谷)

【他文献】 なし。

【現代語訳】 返事

惜しくない我が身は、はかない露よりも消えることなく、我が子のあつてなく消えた命を見ることが、たまらなく悲しいのです。

【語釈】

○をしからぬ―すでに年経て生きたので、これ以上の長命を望まない。

惜しからぬ命やさらに延びぬらん終はりの煙しむる野辺にて

(拾遺集・雑上・五〇二・元輔)

今日よりは露の命も惜しからず蓮に浮かぶ玉と契れば

(実方集・五)

惜しからぬ命なれども心にし任せられねば憂き世にぞ住む

(伊勢集・二〇六)

○つゆよりもきえなくて―底本「きえなく―て」を他本で訂す。露ははかないものとされ、人の命の短さに譬えられるが、ここでもそれを前提とする。

秋風になびく草葉の露よりも消えにし人を何にたとへん

(拾遺集・哀傷・二二八六・村上天皇)

小式部内侍、露置きたる萩織りたる唐衣を着て侍りけるを、みまかりて後、上東門院よりたづねさせ給ひける、奉るとて置くこと見し露もありけりはかなくて消えにし人を何にたとへん

(新古今集・哀傷・七七五・和泉式部)

亡くなりたりける人の持たりける物の中に、朝顔を折り枯らしてありけるを見て

朝顔を折りて見んとや思ひけん露よりさきに消えにける身を

(和泉式部統集・一九四)

○はかなきことをみるぞかなしき―親より短命な我が子の死を目前にした、現実のことと信じられないような痛切な悲しみ。

世の中のはかなきことを見るころは寝なくに夢の心地こそすれ

(新古今集・哀傷歌・一九八八・盛明親王)

もろともに苔の下にも朽ちもせて埋まれぬ名を見るぞ悲しき

(金葉集・雑下・六二〇・和泉式部)

【評】 作者は人生経験を十分積んだので、これ以上の長命は望まないが生き続け、一方で若い我が子があっけなくも先に死んでしまった。命の不条理こそが悲しみの根本だと訴えた。